

十日町市松代における高齢者と子供のための公共的建築の提案 「おやっこ村のダイニングキッチン」 と「遊びの道場／遊びの広場」

A proposal of public building for the elderly and children in Matsudai, Tookamachi city “The dining kitchen of Oyakko village” and “the dojo studio and the square of play”

後藤 哲男¹
GOTO Tetsuo

キーワード：松代、高齢化、公共建築
Keywords：Matsudai, trend of aging, public building

Matsudai district of Tokamachi-shi is a sparsely populated area where population decreased 72% for 50 years. At the same time aging advanced.

There was two kinds of work in the village. One is work for village maintenance and is work for cash income for families one more. This trend of aging has been difficult to continue the work of the community maintain.

I make suggestions of public buildings for the elderly and children using the factory became vacant for such region.

1. はじめに

平成 25 年秋、十日町市松代の旧染物工場の建物を活用し地域を盛り上げていきたいという話が持ち上がった。十日町市松代の地元で活躍している「おやっこ村」² 代表や議員、松代中部地区の人々と、村木薫氏（新潟中央短期大学教授）や、後藤研究室（長岡造形大学）が協働で知恵を絞ることになった。本論は昨年から引き続き打ち合わせを重ねてきた中で「豊かな生活」とは何かを考察し、現在松代で取り組んでいる「おやっこ村」の活動も含めて松代地区の将来像を共有しながら住民が主体となる提案をまとめたものである。

2. テーマとその背景

松代地域の里山の暮らしは、縄文時代から連綿とその生

活空間を受け継いでいる。代を重ねる毎に山を切り開き、棚田を作り、それぞれが共同体的な生活集団を形成して、厳しい冬にも耐え、飢饉も乗り越えて来たからこそ今の集落がある。

里山の生活者には 2 種類の仕事があると言われている。一つは「仕事」又は「自分仕事」、もう一つは「稼ぎ」又は「他人仕事」である。里山の生活、特に雪国の生活は厳しいだけに、仕事は多い。山の手入れは言うに及ばず、棚田の造成、手入れ、水の管理、道路の管理、田畑の仕事、村の寄り合い、祭りの執行。毎日の仕事から季節の仕事まで様々な展開している。

一方、今の時代を生き抜くには、現金が必要である。里山の農業を主体とした産業では十分な現金収入が得られず何らかの『稼ぎ』が必要であり、兼業は避けたい。その上に『仕事』もこなさなくてはならず、負担は大きい。

『稼ぎ』に特化して山を下りる若者が増加した理由は、共同体内での義務としての『仕事』から解放され、労働が即現金収入につながるということによる。それは非常に魅力的であったし、残った親の世代が村の仕事を引き受けてくれた背景がある。

里山での生活者は都会に働きに行った子供達を一時の『出稼ぎ』とおおらかに見なしていた。共同体維持の仕事は自分達で十分やっていけるという自信があったのだと考えられる。戦後の高度経済成長期、都会は働き手を必要とし、集団就職という形態は労働力を農山村から根こそぎ奪い取ったのである。里山では現金収入がのぞめないという実態がそれを後押しした。生活の中流化、所得倍増を期待した若者はこの流れに乗り遅れまいとして積極的に故郷を後にした。この傾向は長く続き、次第にふるさとに帰ってくる『出稼ぎ』ではなく、出て行ったきり都会に定住するものが増えた。その結果、里山の過疎化が進行し、都会は過密化していった。里山限界集落とまで言われる状況をまねいたのである。

山の生活における『仕事』から開放されて、得たものは明らかに安定した現金収入だが、その一方、都会では放棄した山の「豊かな暮らし」ほど充実した生活は展開できていない。出稼ぎにでた第一世代は子育てを終え、勤めを退くと、都会の郊外の住宅で周囲との希薄な関係の中に取り残され、再び「豊かな生活」とは何かということを考えざるを得ない。

過疎化の傾向から 50 年³を経た今、もう一度『仕事』と『稼ぎ』について考えてる時をむかえている。これは日本の風土に暮らすうえでこれからの「豊かな生き方」に関わる避けて通れない問題でもある。

3. 社会的、時代的意義

松代の中部地区は 7 集落（小荒戸集落、田沢集落、菅刈集落、太平集落、池尻集落、青葉集落、千年集落）からなりたっている。2011 年で、最大の集落は太平の 109 戸、

¹ 長岡造形大学 教授

² 平成 25 年地元発起人 10 名による準備委員会を経て、10 月 11 日設立した組織。

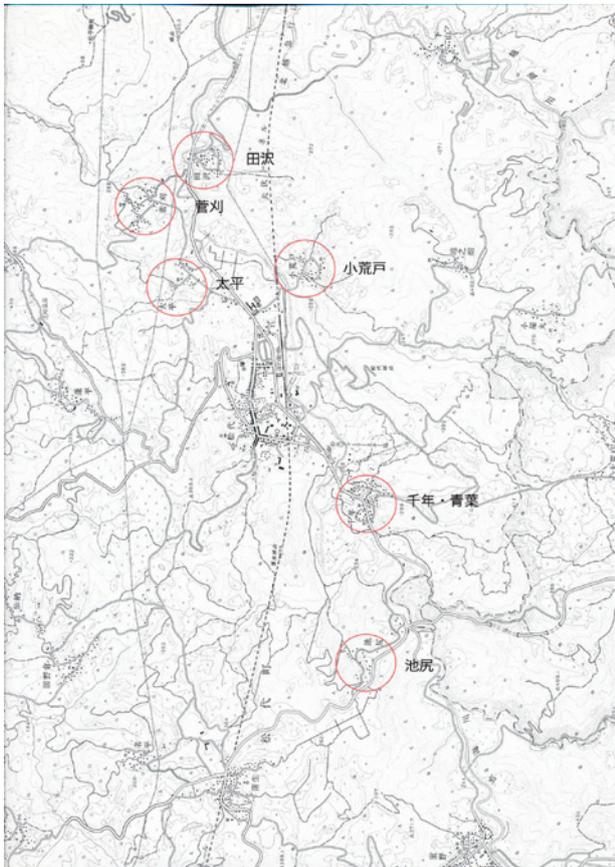
³ 松代地区の人口は 1960 年代から 1970 年代にかけて減少に転じた。1960 年時点で人口 13,076 人、70 年までの 10 年で約 3300 人、次の 10 年で約 2600 人、次の 10 年（1990 年）1900 人、さらに 1000 人減少し、2000 年には総数が 4240 人となった。21 世紀の最初の 10 年で約 550 人の減少を見、2010 年現在 3686 人となり、50 年前の 28%強となっている。

最小は池尻の9戸、7集落全体で272戸が暮らしている。(松代全世帯1420世帯の19.2%)2010年時点の1世帯当たり人口は2.6人、人口は概ね700人、人口構成比で見た場合、松代地域は65才以上の高齢者が43.2%、小学生は3.1%となる。松代おやっこ村を企画したのは、この7集落の人々である。

その主旨は以下のように宣言されている。

「年々高齢化と過疎が進み、里山や棚田の保全、農産物の生産販売、祭りや行事の伝承なども難しくなってきました。しかし、この豊かな自然と暮らしを守るために、今できることをやっといこうと『松代おやっこ村』という組織を立ち上げました。そして都市の人々を呼び込みながら、共に人間らしい暮らしのあり方を体験できる豊かな村をつくりたいと願っています。

『おやっこ』⁴とは、土地の方言で『親戚』という意味です。里山の自然をまるごと味わいながら、都市の人々との親戚のような関係づくりを目指して様々な取り組みを行っています。



地図1 松代地区の中部地区

具体的な取り組みは、里帰りツアーと称して、「雪ほり応援隊」「お祭り応援隊」「里山保全応援隊」なる企画と宿泊をセットにしたグリーンツーリズム的なものである。ここでの特徴は一口3000円の賛助会員を募集することで、会員には山でとれた野菜等を宅配し、運営費用にあてよう

⁴ ムラ内における家同士のまとまりは本家・分家の関係が強く、本家をオヤケ(親家)、分家をイエモチ(家持)といい、本家・分家の同族集団をマキといった。マキ親である本家の主人はムラの重立となる資格があり、本家格や財力のある家が重立となった。ムラの運営の責任者は惣代(後の区長)で、重立の有力者で人選し、重立寄合に報告し決定された。(松代町史下巻P511)

としている。しかも賛助会員は都会に住む不特定多数を意識するのではなく、1960年代以降村を出て行った人々からまず参加してもらおうとしている。

以上の取り組みはかつて山里の共同体における一部の「仕事」を外部からの支援で維持しようという試みであるが、雪ほりの全てをお願いすることは不可能で、里山の下草や下枝はらいの全てを実現することも難しい。また祭りの参加では、その全てを委ねるわけではないのである。それでも山の共同体を維持するための「一助」として、現在の住民を元気づけるような支援を求めているとみることができる。

生活維持のために、村の人々はそれぞれに兼業農家として役所の職員や団体の職員、教員、あるいは地域のサービス業とも言える建設業(冬は除雪作業)などに従事し、「稼ぎ」の部分を確認している。それも、先に述べたように60才以上の高齢者の割合が50%を超えているということは、年金生活をしている人も多くいるということになる。本来であれば、村の「仕事」は、体力がある成年層が担当してきたと思われるが、現状では60才以上の高齢者が担っている姿が浮き彫りにされてきている。この傾向は2020年まで続き、その時点での60才以上人口は全体の59%を占めることになる。それから先は60才以上が約60%を占める時代が続くものと思われる。

一方、1960年に松代地区には2215人いた小学生は2010年には115人になっている。50年経って5.2%に落ち込んだ。集落が今後持続的に継続していくために、人口構成の偏りをなんとか正常にたてなおし、子育て世代の成人層を増やさなくてはならないことは明らかで、少子高齢化の傾向を少しでも緩和するために踏み出すその一歩はどのようなものかを考えなくてはならない。子供を育てる世代を増やすための一歩である。

4. みんなが集う場所の提案

昔から伝えられて来たコミュニティは今、瀕死の状態にある。なくなっていくうちにテコ入れし、新たな方向に向かわせる必要がある。この新たな方向とは、新たな魅力を若者達が発見してくれるということである。目指すべき新しい方向を提案したい。

里山にある村では、本家を中心とした「おらっこ」の集団が確たるものとして江戸時代から存在してきた。マキとも呼ばれる「おらっこ集団」同士の関係の中に『仕事(協働で行う集落維持のため)』が存在していたのである。しかしながら、人口減少の中であって「おらっこ集団」を維持するだけの本家と分家による構成員そのものが減り、現実的に以前のようなマキの関係が希薄になり、機能しなくなっている。本来行われなくてはならない「仕事」が十分に行われなかったということがおき、結果として里山の荒廃や祭りの維持が困難となるケースがでてきたのである。共同体が崩壊の方向にある時従来の方法の維持を追い求めてももはや不可能であるため、新たな関係性が模索されなくてはならない。一方では、行政的に大きな単位に合併され、かつての共同体の仕事が公共サービスとして一定レベルで確保されることになった。インフラ的側面の仕事はこのような傾向である。

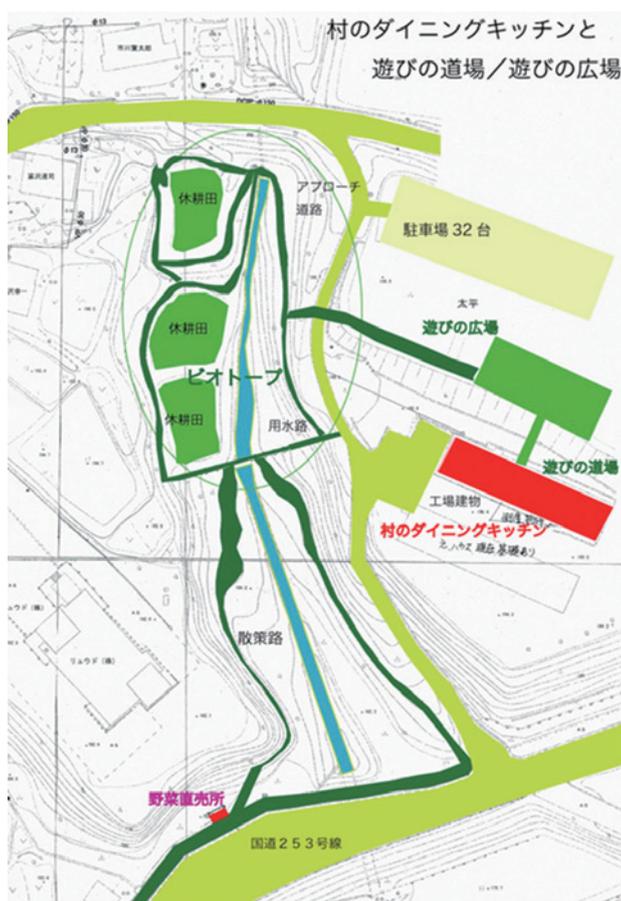
そんななか、「より豊かな生活を実現させる」ためにかつて「仕事」を通して培ってきた共同体的体質を変化させ、新たな道を見つけることを目指しひとつの提案をする。

ある集団の「仕事」の枠を「食」と「遊び」に振り向け、都会では得られない人同士の関係を築くことを、大平集落に残された空き家工場の建築に託するのである。

太平集落に旧染色工場（三ツ友シルク工場）の今は使われていない大きな2階建ての建物がある。この場所を活用し、人々が集う拠点づくりを提案する。



写真2 旧染め物工場の1階



提案図



写真1 閉鎖された旧染め物工場の建物

5. 村のダイニングキッチンと遊びの道場の提案

先にのべたように松代地区の65才以上の高齢者は43.2%。60才以上で51.6%、今後10年で60才以上は約60%を占める。

大家族を維持し、代々伝えられたしきたりを守り、地域を支えていた家族は高度経済成長から現在までの間、次々と若者を都会へ送り出してきた結果、高齢の夫婦単位の世帯が増え、年金生活者となり、必然的に独居する老人も増加した。人間はその生涯を終えるまでは健康で暮らせることが理想だが、一般的には食事を作れなくなる段階を経て、他者からサポートを受け、施設と自宅を行き来する段階、施設に入る段階へと移行する。

個人が今までの人間関係から孤立するこの傾向は、少なくとも都会では理想的な老人介護のスタイルとして受け入れられている。それでも全ての人がこの恩恵を受けることは難しいのも現状である。

かつて故郷を出て、「稼ぐ」ことに没頭した世代は、故郷の苦しいけれど「豊かな生活」を無意識に捨て、都会の生活者となり、小さなコミュニティの中で他者との関係性の希薄な中で暮らしている。しかしその故郷も今や都会と同様の道筋をたどりつつある。都会は多くの人間がいる中の小さなコミュニティであるが、少ない人間しかいない小さなコミュニティである中山間地の集落はやがて消えるように無くなってしまいうしかない。

なぜなら、山の生活は「仕事」が多いばかりか、地域コミュニティの活動が停滞した状態では誰も何の魅力も感じないからである。都会にはない「豊かな生活」を実現させることは中山間地で実現する可能性があるものの現状維持のままではどうも難しいのである。一過性ではなく落ち着いた暮らしながら活気を取り戻す方向を打ち出したい。

工場建築の大広間には様々な使い方の可能性がある。当面は60%以上の割合の60才以上の人々が利用できる大広間として使いたい。

(1) 食を通じて集う

『食』は誰にとっても必要不可欠であり、風土の個性を表現したかけがえのないものである。ふるさと感じたり、母親を感じたりすることのできるものであり、正月やお盆に食べるものは格別の家族の思い出を紡いでくれる。ま

た、食卓を囲み、楽しみを共有することにより、コミュニケーションが生まれ、生きる喜びや楽しみ、人生の目標が人々の心の中に芽生えるかもしれない。「食」は人間生活上の最低限の営みではあるが最も高度なファクターである。

高齢化が進行する地域において、生きている証としての食事に光を当てる。村のダイニングキッチンである。『仕事』と『稼ぎ』の分け方からすると、このダイニングキッチンは『仕事』の部類に入る。労働力を提供する人、食材を提供する人、食べる人の三種類がいる。

食べる人の中には地域とは関係のない観光客が入る場合も想定する。観光は名所旧跡をみることだけではなく、地域の人々の生活を見たり体験することにも関心が寄せられる。

地域に根ざした『食』は個性溢れるものであり、観光客にとっては大変魅力的なものである。地元の労働力を提供する人、食材を提供する人、食べる人に観光客を加えた4者の関係性をつくり、現金の動きがそれほどなくても維持管理できるような仕組みを考えることにより、豊かな時間を共有できることになる。『稼ぎ』としてやるのではなくあくまでも『仕事』としての位置づけとなる。

地元の人は当然高齢者が主体となる。人々は生き生きと仕事をし、楽しく食事をし、観光客とも会話を楽しむ生活となる。これは日常でありかつお祭りでもあるような要素である。冬の自然が厳しくとも、高齢者が何の不自由もなく楽しく、目標をもって暮らしているという姿は自分達がどこに住まうかと考えはじめた人々にとって魅力的に映るはずである。



写真3 囲炉裏を囲んで談笑

(2) 遊びを通じて集う

『遊び』もまた同様、人間の成長にとって不可欠な要素である。今、都会でも田舎でも子供達はコンピューターやスマホの画面を見つめ、大人が作った筋書きが限定された遊びに夢中である。

現代の遊びの道具はあまりにも目的に縛られすぎるのではないか。そして、解答が一つに限定されているようなものが多い。つまり、遊びの中に創意工夫をする余地が残されていない。その遊びの中で行き詰まったらもはや出口がないため、子供達はそれを放り出すしかない。

子供達を釘付けにできるような『遊び』を考えることや、いかようにでも展開できる遊びの場を提供してくれる自然

にもっと目を向ける必要がある。

建物の2階部分に「遊びの道場」を提案する。



写真4 旧染め物工場の2階

遊びの場は5間四方の正方形の連続を写真4の2階の空間に考える。静謐な空間とし、昔の剣道の道場のような雰囲気想像している。壁一面に遊びの道具が収納され子供達は道具を選び、遊び、仕舞い好きなだけそれを繰り返すことができる。

この『遊びの道場』は2階に設けるが、窓の外的一段上の段と直接結び付けて屋外の『遊びの広場』を作ることにもできる。非常に美しい緑の絨毯としての芝生広場があっても良い。ここでは、大地の芸術祭⁵の期間中様々な子供のイベントの開催も可能である。子供達は『遊びの道場』と『遊びの広場』を行き来する。階下では大人達が『食』を中心として会話を楽しむ。



写真5 外部空間 上段の『遊びの広場』を望む

⁵ 大地の芸術祭は十日町地区を中心に妻有地域で3年毎に開催されている。



写真6 外部空間 休耕田方向を望む



写真8 野菜の直売所



写真7 敷地内の水路



写真9 太平集落へさしかかる国道

外部空間は沢に面して造成された平地を2面もち、上段の平地は主として『遊びの広場』となるが駐車場にもなり得る広さもあり、両者が両立するように計画する。下段には本体の工場があり沢はかなりの急傾斜となり、敷地の上半分は自然の川、下半分が堰堤を挟んでコンクリートの三面張りとなっている状態であるが、親水性を確保した計画も可能である。この親水空間は水辺に集まる生物を楽しみでビオトープにすることも可能である。また上段の右岸には休耕田が三枚存在し、外部空間としての『遊びの場』にすることができる。これは格好の野外観察の場になり特に夏、美しい景観と動植物の観察の場として有効に利用できる。

(3) 地場産野菜を通じて集う

『野菜直売所』は太平集落の入り口にあたる国道253号線の車の待避所脇の歩道にある。ここで売られている野菜は農家が現金収入を得るためというより、里山の『仕事』のなかから生み出された産物を他の人々にお裾分けをするといった側面が強い。もちろん、店を出している以上、売る人は1日中張り付いている必要がある。これも先に述べたダイニングキッチンでの労働力提供と同じ意味がある。

提供された野菜を使って料理をつくることと、それを直接販売することは同じ仕事のうちに入り、「稼ぎ」の要素は小さい。

6. 提案のまとめ

以上3つの要素をつなぎ合わせて、太平集落の新たな『仕事』の拠点を構築することを提案する。

第一回の大地の芸術祭から行われている、土壁プロジェクトの延長戦上にこの拠点を位置づけることも可能である。旧染色工場は木造2階建ての工場だが、真壁構造として蘇らせることも考えている。

また、広い1、2階の空間は『ダイニングキッチン』や『遊びの道場』の他に何らかの芸術活動を包含しうる空間である。

人々が集う場所を住民の力で一緒に作り上げること自体大きなお祭りであり、楽しみの「仕事」である。地元で活躍している「おやっこ村」代表や議員の中心とした松代中部地区の人々と、村木薫氏や後藤研究室が協働し、新たな松代の地域像を抱き、若者を迎え入れ、活性化する提案である。

松代は祖先が伝えてきた大切な地域である。多くの結びつきと共に「大地の芸術祭」という一大イベントとも共同しながら作り上げるプロセスそのものが、その第一歩である。

7. 提案の現在と今後

現在、この提案を議論しながら松代地区の住民は少しずつ

つ「おやっこ村」の活動などを通じて前進している。今回の提案がそのなかのひとつに組み込まれ、今後のあり方を探っていけると考える。松代の将来像を共有しながら、松代にしかない「豊かな生活」を体現し出身者や訪れた人にもう一度「豊かな生活」を見直し地域の魅力を実感してもらえれば復興へと繋がる可能性がある。

参考文献

- ・「定住」から「交流」そしてハッピーリアイアメントへ
—十日町市松代地区、『豪雪を拓く』以降 20 年間の挑戦と未来—
早稲田大学文化構想学部 社会構築系 藤井玲子
- ・松代町史 上巻 平成元年 3 月 松代町発行
- ・松代町史 下巻 平成元年 3 月 松代町発行